

令和3年度 学力向上指導改善プラン

三田市立狭間小学校長 佐野 秀樹

学校教育目標		豊かな心で、自ら考え行動できる子の育成			
推進主体		学力向上推進委員会 (校長、教頭並びに学校改革、教育計画、学校評価、研究推進、生徒指導、保幼小・小連携の各担当)			
学力に関する前年度の状況・経年の課題等					
学力 の 状 況	全国学力・学習状況調査結果の状況 (国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	国語 ◇国語科だけでなく、様々な教科・領域における表現の場を経験させることにより、話す(表現する)ことに慣れ、子どもたちの力の伸びを感じることができた。思考の深まりにもつながってきたと感じる。 ◆全体的に、語彙力が低い傾向にある。 ◆文字の情報を読み解くことが苦手なため、問われていることが分からず、意欲を持ってない児童が、一定数ある。 ◆書くことに関して、文章での表現の方法が分からず苦手に感じる児童がいる。 算数 ◇◆授業や朝学習でのドリル練習、新学習システム教員との連携による継続的な取り組みから、基本的な計算技能は定着しつつあるが、学年によっては、四則計算が正確にできない児童が、2割程度いる。 ◆文章題などで、内容を読み取り、関係図や線分図で表すことが苦手な児童が多い。 ◆立式はできるが、その根拠を説明する力に課題がある。	4月	2～3月	
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	◇日ごろからの継続的な取り組みが漢字や計算技能の向上につながっている。定期テスト等でも結果となって表れてきたと思われる。今年度もこの積み上げを継続するとともに、新学習指導要領に沿った学力の定着を図るように取り組む。	成果となる目標 (指標となる数値等)	年度末評価 (今年度の成果と来年度に向けた課題等)	
	授業等からうかがえる状況(各教科)	◇授業の流れとして「めあて」と「振り返り」を意識して展開してきた。見通しをもって学ぶ姿勢が身につけてきている。 ◇朝学習により、学習へのスムーズな流れが身につくつづきがある。 ◆主体的に学習に取り組む子どもたちを目指し、授業改善を図る。	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	評価	
学力向上に係る学習状況・生活習慣	◇◆昨年度当初の休校措置の際に、家庭学習の手引き「夢に向かって狭間っ子」を配布し、家庭学習の指標とした。計画的に活用を促すようしていきたい、さらに効果的な活用方法を考えていきたい。家庭学習の充実が基礎基本の定着には不可欠であるので、今後も積極的に進めていく。 ◇どんな学び方が良いのか、具体的に示すために、月1回の「漢字ノートコンクール」、随時の「自分学習ノートコンクール」のコーナーを掲示板に設けた。その良さを示すことで、一人学びの手にするとともに、学習意欲の向上につながった。 ◆学校評価アンケートより、家庭学習の定着に関する項目で、保護者(67%)と児童(82.2%)の達成数値に開きがみられた。 ・読書に関する項目で、児童「本を読むことは好きですか」(73%)に対して、保護者「家で読書や読み聞かせを楽しんでいる」(51%)と、親子で読書に取り組む機会が持ちにくいことが課題である。	4月	2～3月		
校内研究・研修の状況	校内研究の状況	◇目指す児童の姿を系統立てて明確化し、年間を通して指導することができた。 ◇研究授業では、研究課題を明らかにして事前・事後研修会を持ち、成果と課題を共有することができた。来年度は、学習評価につながる評価基準(長期的ルーブリック等)の作成を目指すことが共通理解できた。 ◇ホワイトボードで授業の流れを示し、めあてやふりかえり、次授業のめあての提示したことで、見通しをもって授業にのぞみ、学んだことを整理することができた。 ◆年度当初に一年間の研究の進め方を明確にし、系統立てたテーマを全職員で共通理解していく。	4月	2～3月	
	校内研修の状況	◇年度初め・終わりの児童理解研修会を活用し、全職員が一人ひとりの児童について共通理解することができた。さらに、巡回相談や教育相談を積極的に活用し、深い児童理解につとめた。 ◆各教員の得意な教科や分野、領域、指導法を交流する場を、計画的に設定する。 ◇児童の取り組んだ成果物(作品やノート等)を掲示して可視化することにより、全ての児童が目指すものや姿勢が明確になり、教員の意識も高まった。	4月	2～3月	
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	◇コロナ禍の中で、保護者や地域の方に、ボランティアとして学習支援をしてもらう機会が設定できなかったが、図書ボランティアの図書室の環境整備、登下校の見守りなど、温かく見守っていただいた。 ◆昨年度は、学校地域運営協議会が、2回は紙上開催となり、具体的な意見交流を行うことができなかった。開催に向けて、時期等を検討していく。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーターを探す必要がある。	4月	2～3月	
	小・中における教科連携等の状況	◇教科担任制を実施することで、教師の専門性を生かし、魅力ある授業づくりができ、児童の基礎学力向上につながった。 ◇小中連携により、生徒指導上・特別支援教育上の視点で情報交換を行った。また、中学校の生徒会が来校して、あいさつ運動や中学校生活のプレゼン(6年生対象)を実施し、連携をはかることで、中学校生活へのスムーズな移行を目指した。 ◆出前授業や研究授業の交流など、今年度は計画実施する予定である。	4月	2～3月	
学力向上に向けての重点的な目標	学力向上に向けての重点的な目標 (指標となる数値等)	4月	2～3月		
A アクティブラーニングを意識した授業の確立	めあて、学習の流れの提示により、ユニバーサルデザインでの授業づくりを意識する。 めあてを意識した振り返りをさせる。 課題設定の工夫、効果的な言語活動、相互交流に重点をおいた授業展開をする。 授業形態の工夫をする。 主体的な学びに重点を置き、探究的な学びのプロセスを大切にします。	学習の流れの提示の仕方を校内で統一し、個々が何を、どの手順でどのように学ぶのか、めあて・見通しをもって粘り強く学べるようにする。 振り返りをおこなうことで、何ができるようにするのか、何ができるようになったのか、メタ認知できるようにする。 個人思考を深めるためには、ペアトーク、グルーptークは欠かせない。多人数の学級でも多様な授業形態がとれるよう、ホワイトボードやタブレットの活用など、多様な学習方法を検証する。 「わかった!」「おもしろい!」と思えるような授業を展開する。	学習の流れが明示されていることで、めあてや見通しが共有され、多くの児童が安心して落ち着いて授業に取り組んでいる。 ◇振り返りの習慣が定着し、自分が何をどこまで学んだか、理解が不十分などを見つめられるようになりつつある。 ◇「学習に進んで取り組んでいる」「好きな学習がある」という児童が多く、魅力的な授業が子どもたちの評価につながっていると考えられる。 ◇「学習に楽しんで取り組んでいる」「好きな学習がある」という児童が多く、魅力的な授業が子どもたちの評価につながっていると考えられる。 ◇◆個人用タブレットで、自分の意見を書き込んだり、他者の意見や考え方と比べたりする機会を増やすことができた。ペアやグループでの話し合いも行いながら、思考力を高めた。 ◆本校の児童の実態に合ったGIGAスクールの構築(学習ソフト、環境)を推進する。	A	
B 思考力・表現力の育成 ○基礎基本の充実	言語領域、計算などの技能領域の力をつける。 四則計算が正確にできる児童の割合を、90%以上にする。	言語領域(漢字)の学習については、漢字テストなどで日々達成度を把握し、個々のサポートに生かしていくようにする。また、意欲的に取り組めるよう、評価を工夫する。 計算力をつけるため、継続的なドリル学習やプリント学習で、四則計算の定着をはかる。 新学習システム教員との連携や、「がんばりタイム」の活用で、個々のつまずきに応じた支援ができるようにする。	朝学習や家庭学習で繰り返し練習することで、漢字や計算などの基礎基本の力は定着してきている。算数科では新学習システム教員との連携や少人数学習で、個に応じた指導の効果が出ている。 ◇◆「がんばりタイム」の活用や放課後の補充学習で、個別の指導を工夫した。早期からのつまずきに対応していくため、学習ソフトをより活用していきたい。 ◆学力学習状況調査で、国語・算数とも、話の要旨を読み取ることに課題がある結果となった。要旨を読み取り、短くまとめるなどの活動を行い、言語能力を高めていく必要がある。	B	
○ノートづくり	自分の考えや友だちの考えを記し、思考の流れを残すようにする。 図や表を用いながら、物事、数量の関係を捉えたり、表したりできるようにする。 めあてと振り返りを書き、自分について力を意識させる。	学年や発達段階に応じたノート指導を行う。(課題・式・図表・理由・ポイントの記入) 自らの考え、思考過程、理由、根拠などが分かりやすく記述し、表現する機会を多く設定する。 ノートのモデルを提示し、図や表・振り返りの書き方など、丁寧に指導する。 めあてに対する具体的な振り返りを常に意識させる。	◇前期は漢字ノートコンクール、後期は算数ノートコンクールに全校で取り組んだ。教師の価値づけの記述を付けて掲示することで、よいノートづくりに関心を持つようになってきている。 ◇ICT機器の活用により、授業中に即時にノートの提示ができるようになり、ノートを使って発表したり意見を交流したりすることを、授業に取り入れられるようになった。	B	
○読む力の育成	音読表現を工夫することができる。 課題に沿って情報を取り出し、解釈することができる。 言葉に関心を持たせ、語彙力を高める。	段落相互の関係や文章構成、重要語句、登場人物の変化、情景の変化など、教材の特性に合わせてより重点化させて授業を展開する。 音読カードなどを活用して、継続的な音読指導を行い、確実に評価する。	◆授業の中で、音読の指導が十分にできない現状であるので、家庭学習で継続的に音読練習を行い、音読表現ができるようにしていきたい。また、めあてを持って読むようにすることで、文章の内容理解につなげていく。	B	
○根拠や理由に基づいて考える力の育成をはかるためのカリキュラムマネジメント	理由や根拠を明らかにして、書いたり話したりすることができるようにする。 場に応じた表現の工夫をさせる。 友だちと共に考え学ぶことにより、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業の工夫をする。	課題に沿って考え、解決していくために、学習内容を焦点化する。 学習発表の場を設けたり、異学年交流をしつづける中で、相手意識を持った表現力を伸ばす。 プログラミング学習やタブレット等、ICT機器を生かした授業を積極的にすすめる。 全校行事「狭間フェスティバル」(3学期)において、教科学習を活かした発表をする。体験型ワークショップで、表現する力を養う。	◇授業のまとめや総合的な学習で、ノートやワークシートに加え、タブレット端末を活用した表現が工夫されるようになってきた。 ◇全校生での「狭間フェスティバル」は、残念ながら感染予防のために実施できなかったが、教科の学習を活かした発表を、児童が積極的にアイデアを出して計画できた。 ◆タブレット端末の活用について、個々の活用スキルアップのために6年間を見通して、系統立てた指導計画を作成する必要がある。また、教師間で授業での活用方法や活用場面の交流・情報交換の必要がある。	B	
C 家庭学習の習慣の確立と充実	家庭学習の手引きの見直しを行う。手引きに基づき学級指導し、家庭へ配布、懇談で啓発する。 家庭学習が授業に活かされるような課題を工夫する。 学校評価アンケートの、「子ども自らが家庭学習に取り組む」の項目において、75%の達成を目指す。	家庭学習の指標として、家庭学習の手引き「夢に向かって狭間っ子」について、自主学習の内容などの見直しをおこない、学年に応じてどんな内容をどんなふう学習したらよいか、児童に具体的に示し指導する。 「漢字ノートコンクール」や「自由ノートコンクール」などで、自分の学びを紹介・披露する機会を作り、一人学びへの意欲をもたせるようにする。	◇◆家庭学習の手引きを年度当初に加え、2学期の初めにも配布し、家庭学習の指標として活用を促した。学級懇談会などが行えるようになれば、保護者と話し合う場面を活用し、さらに連携を深めたい。 ◇「漢字ノートコンクール」や「自由ノートコンクール」を行い、全校生が目にする場所に掲示することで、他者のがんばりを認め、自分の学びに活かそうとする意欲につながった。 ◇学校評価アンケートにおいて、児童の83%が進んで家庭学習に取り組んでいると評価している。 ◆本校独自の振り返りシート「はまっこノート」で、家庭学習について振り返る項目を作り、自己評価するとともに、家庭との連携を高める。	B	
D 読書活動の推進	本を読むことを楽しむ児童の増加を目指す。 本を資料として活用できる(本の紹介、調べ学習など)児童の増加を目指す。 学校評価アンケートの、「家で読書や読み聞かせに取り組んでいる」の項目において、65%の達成を目指す。	学校司書・図書ボランティアとの連携をはかり、読書に興味をもてる工夫をする。 読書通帳の活用や、ステージ別読書を行って、日常的に本に触れる機会をもたせる。 各教科の中で、活用できる本(資料)を提示し、学習活動に広がりを持たせられるよう支援する。 「狭間っ子読書の日」の週を読書週間とし、朝の帯時間を読書タイムとすることで、読書活動を啓発・推進する。	◇感染症拡大防止のため、今年度も図書室の開放や図書ボランティアの活動が制限されたが、学校司書や担当教師を中心に、図書室周辺の環境づくりや、選書会・予約会など、児童が読書活動に興味をもつよう工夫している。 ◇引き続き読書通帳達成賞や年間百冊読書賞、ステージ別読書などの取り組みによって、多読につながり、幅広い分野の読書に児童が興味を持っていた。 ◇読書週間の設定で、朝読書により落ち着いて学習に導入できるようになった。 ◆学校評価アンケートにおいて、約80%の児童が本を読むことが好きと回答しているのに対して、保護者は52%と開きがある。親子読書の日の啓発を行い、家庭と連携して読書活動を進める。	B	
E 児童理解に基づいた指導体制の確立	主体的に楽しみながら外国語を学び合い、自分の思いや考えを豊かに表現できる子どもを育成する。	教材に適した授業展開・指導法を通して、主体的に楽しみながら外国語を学び合う子どもを育成する。 自分の思いや考えを豊かに表現するための必要な手立てを、意図的に計画的に講じる。	全教員が授業公開を実施する。 研究授業では、事前研修会を持ち、研究課題を明らかにし、ワークショップ型の事後研修会により成果と課題を共有する。 毎授業のふりかえりと次授業のめあての提示をする。 音声指導を3年生から取り入れ、音声と文字のつながり意識させ、英語スキルの定着をはかる。 自分の思いや考えを豊かに表現するために必要な手立てを、系統立てて実施する。	単元の目標や評価規準となるルーブリックを子どもと一緒に作成、共有できたことで、子どもの主体的な学びにつながった。 ◇コロナ禍で声を出してのコミュニケーションがされる中、各担当が工夫して授業を行った。特に、ICT機器を用いた授業アイデアを共有することで、授業準備や授業自体の効率化にもつながると考えられる。 ◇オンラインを活用し授業公開することで、それぞれが授業を視聴し授業研究会に臨めた。授業研究会での学びが次の研修に活かされた。 ◇研究テーマに沿った指導内容・指導方法の研修を行い、教師間で共通理解を図れた。 ◆学園の研修にとどまらず、授業のアイデアを全教職員で共有していく機会を増やしたい。 ◆活動内容とめあてを明確化していく必要がある。	A
F 社会に開かれた教育課程を支える風土の醸成	広い分野で多くの学校支援ボランティアの活用を推進する。	ボランティアとの交流を、単元構想に位置付けて、年間を通して計画的に行えるようにしていく。 コーディネーター的な地域人材を発掘する。 学校地域運営協議会において協議する。そして、それぞれの役割について確認していく。	◇感染症拡大防止のため、保護者や地域の方に、ボランティアとして学習支援をってもらう機会が今年度も設定できなかったが、図書ボランティアによる図書室の環境整備、登下校の安全指導など、温かく見守っていただいた。 ◇学校地域運営協議会において、児童の学校生活の様子や学校のコロナ対応の様子の見学を通して、児童や学校運営について意見交流することができた。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材を今後も探していく。 ◆学校、地域、保護者がそれぞれの立場で、児童に対する役割や連携することの意義について話し合う機会を設定することも必要である。	B	